

おもろいことで人を生かし世界に貢献する

～テープで農業分野に挑戦・若手と一緒に活性化～

菊水テープ(株) 代表取締役社長 西澤 大輔 氏



会社概要・事業内容

本社：八尾市東山本新町／設立：1954年／資本金：4,800万円／従業員数：149名

事業内容：粘着テープの製造販売 包装用、工業用、建築用など

会社概要・沿革

菊水テープ株式会社は昭和24年創業、29年設立、来年75周年を迎えます。事業内容は、包装用、工業用、建築用、事務用、農業用、標示用などの粘着テープの製造、販売及び輸出入です。創業者は父である西澤袈裟人氏。昭和30年代に八尾に工場を新設し、製品・原材料の検査と試験研究及び新製品開発のため研究室を設置し、日本業界において初めてダンボールケース梱包用クラフト粘着テープの量産に成功し、大型テープメーカーとして国内市場の信用を確立しました。同じく昭和30年代に香港の展示会に出展。その反応が良く、創業者が剣道でつながりがあった台湾人の呉氏を日本に呼び、八尾の工場で技術指導を行い昭和44年に台湾菊水の合併会社をつくることとなります。この頃テープ業界は右肩上がりで新たに設備投資を行っていく中で古い機械を捨てることなく台湾に現物というかたちで出資。菊水の名は、父が楠木正成の「何回失敗しても立ち上がって成功する」という生き方が好きだったことからきています。その考え方は行動理念の「やればできる」にもつながっています。

会社がますます勢いを増していく中で、創業者である西澤氏が55才という若さでこの世を去ることになります。

事業承継

父が亡くなったのが4歳のとき。母から聞かされ続けた言葉が「大輔が大人になって菊水テープの社長になる時、あいつはちゃんとやるやつだから頼んだぞ」という父からの遺言。4代目として就任するまでは、2代目・3代目社長が財務状況の悪い中、経営をつないでくれました。入社してから、父が人の面倒見がよかったことから、父に世話になったという人たちに支えられ、今にいたっています。ラッキーなことです。会社では工場、現場、営業、経理を経験し、2014年40半ばで社長に就任。その時同友会に入会します。松下幸之助や稲森和夫の経営本を読みまくり、理念をもち財務はわかっていたましたが、方針の部分がスカスカだったものを指針セミナーで勉強することになります。

事業展開

台湾菊水は現地の人で行い自己資本比率は90%。マーケットは台湾国内がほとんどを占めています。台湾の人件費は、今は日本の6掛け程度で決して安くはありません。ましてや円安も影響し台湾でつくって日本にもってくるなら、日本でつくるより安い

ものに限定しないと難しい。台湾は今進出しても難しいだろうと考えています。

今年、ドイツの展示会で環境の製品をPRしました。脱プラ、バイオマス、ダストレス、リサイクルがテーマとなっており、リサイクルできるクラフトテープの引き合いが高く、またリサイクルした材料を使っているテープや、植物由来や天然素材の紙など話題性がありました。今年は弊社にとって10月がキーワードで、ドイツの展示会での環境をテーマとしたものを日本仕様にし、各展示会に出品する予定です。

菊水テープのビジョン

ここ2年ほどの間にケガや入院することがありました。そのとき「自分は何をやっておきたかったのか？」と自分に問いかけることがありました。そこで出てきたのが「おもろいテープづくりたい！」でした。今、『農家を守るシリーズ』というものがあります。九州でカボチャをつくっている農家さんが、色あせを防ぐためにそれまでは新聞紙を巻いていたのですが、水にぬれるとボロボロになってとりにくい。そこでテープを貼ってみようというんなテープを試した中で、もっとも剥がしやすかったのが菊水のテープだったとのこと。調べてみると全国で困っている農家があり、それならカボチャやりんご、なしと手がけています。ほかにもテープに印刷してみても事務所の入り口にトリックアートを貼ってみたり、弱粘着、強粘着、耐寒、耐熱、マスキング、いろいろな売り方やパッケージを見直したり、まだまだおもろいテープがつけれるなと思っています。また若い社員に「3年後ドイツでもう1回展示会やるぞ」と声をかけ、チームを組んでアイデアを出し合うことで活性化してきています。10月には商工会議所が行う85社ほどが参加するオープンファクトリーで、工場働いている人たちにフォーカスし、お父さんがどんなことをしているのか子どもたちが見にくるとか。とにかくまだまだおもろいことをやっていきます。



文：日中経済交流研究会 広報委員会
心財育成(株) 安達 美由紀